

開化篇

映画文学人生論

- 011) 浮雲 二葉亭四迷
012) にごりえ 樋口一葉 参考：今井正監督の映画
013) 武蔵野 国木田独歩
014) 不如帰 徳富蘆花 参考：土居通芳監督の映画
015) 蒲団 田山花袋 参考：若松孝二の監督の映画

ざんぎり頭を叩いてみれば

文明開化の音がする

黒船来航により、鎖国をやめて開国にふみきつた日本は西欧にならって文明開化をすすめる道を選択した。「半髪頭（ちよんまげ）をたたいてみれば、因循姑息な音がする。総髪頭（長髪）をたたいてみれば、王政復古の音がする。ざんぎり頭をたたいてみれば、文明開化の音がする」。

文学も文明開化の一翼をになって、近代化される。「人はなんによって生きるか」などという問いを発するようになったのはおそらくこの時代だろうと思いつながら当時の話題作五篇を選んだ。

浮雲 二葉亭四迷

にごりえ 樋口一葉

武蔵野 国木田独歩

不如帰 徳富蘆花

蒲団 田山花袋

『浮雲』は、言文一致の文体で書かれた日本の近代小説の始まりを告げた作品と文学史上の評価を受けている。

それに対し、雅俗折衷文語体で書かれた『にごりえ』は江戸時代に逆戻りしたような趣きがあるが、因循姑息ではない。開化期の荒波にもまれ、波間に沈んでいく庶民を描いた樋口一葉の語り口は新しい。島崎藤村ら『文学界』の作家たちと交流した新進女流作家らしい新しさがある。



開化篇

映画文学人生論

『武蔵野』は国木田独歩の第一作品集の題名。十
八篇を選んで編集したもので、その中には文語体
で書かれた短編が多いが、集中の白眉は言文一致
体の『武蔵野』で、近代日本の自然主義の代表作
と目されている。ただし、ツルゲーネフの散文や
ワーズワースの詩のほかには蕪村の俳句も引用され
ており、和歌俳諧の風雅の伝統も継承している。

『不如帰』は『金色夜叉』や『婦系図』となら
ぶ新派悲劇のイメージが強いが、原作を読んでみ
ると、日清戦争が行われた明治二十七年の話であ
る。富国強兵政策を推進する明治維新政府が早く
も聯合艦隊を編成して、外国の艦隊と交戦する戦
争小説でもある。ヒロインやその家族の实在の歴
史的人物とのモデル問題もあって、開化期日本の
歴史の一断面を伝えて面白い。

『蒲団』は人間の煩惱の自然を赤裸々に描き、
日本的私小説のさきがけとなった。

主人公は作者自身と思われる中年の小説家。妻
子がいるのに、美しい女弟子を恋慕し、その女弟
子に愛人ができると嫉妬に苦しむ。最後に女が立
ち去ると、女の蒲団に顔を押し立てて泣く。

『蒲団』以後、体面をかなぐり捨て、煩惱をそ
のまま告白する自然主義的私小説が流行した。夏
目漱石のいう内発的進化の一面だとは思いますが、も
しかしたら内発的退化かもしれない。

泰山木芽吹きふくらみ花開く